

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成26年11月25日 NO.60 (160)



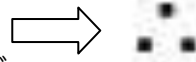
オー君 「あ！何だ？この写真は？左は種か実のようだ。右は白い花だね。」

花ちゃん 「これは、お茶よ。お茶の種と花ね。この種は、この前3年生が見つけてくれて、校長先生にプレゼントしたそうですよ。」

オー君 「へえ一種なんだ。何だか実のようにも見えるけどね。」

花ちゃん 「この種が3つくらい入っているのよ。」

それで、地函記号のお茶畑はこうなんだ。



オー君 「へえー！お茶って、緑色をしていて、よく飲んでる、あれでしょ？」

花ちゃん 「そうよ。オー君、知らなかったの。これは花だけど、葉っぱをつんで、むしたり、それから手でもんだりして作るのよ。」

オー君 「へえー。何でも知っているんだな。」

モンタ博士「花ちゃん、オー君。今日はお茶のお話かね。ぼくも仲間に入れてほしいね。」

オー君 「モンタ博士もお茶は好きでしょ。お茶っていつごろから飲んでいるのかな。」

モンタ博士「昔の中国でね、ある人がお湯をわかそうして、そこに木の葉が落ちて、お湯の中に入り、美しい色になって、それを飲んだら、よい香りで味もよくて、元気が出たそうだ。それがお茶の始まりさ。」

花ちゃん 「お茶^{ちゃ}っていろいろあるんですね。モンタ博士はどんなお茶^{ちゃ}が好きですか。」

モンタ博士 「緑茶^{りょくちゃ}もいいし、紅茶^{こうちゃ}もいい、それから、ウーロン茶^{ちや}もおいしいね。」

オー君 「へえー、いろいろあるんだ。」

モンタ博士 「でもね、緑茶^{りょくちゃ}、紅茶^{こうちゃ}、ウーロン茶^{ちや}はみんな、同じお茶^{おな}の葉^{ちや}っぱで作る^{つく}んだよ。」

オー君 「えっ！みんな同じ葉^{おな}っぱから作る^{つく}の。」

モンタ博士 「作り^{つく}方がちが^{かた}うのさ。ちょいとむずかしいお話^{はなし}は、今日^{きょう}はやめとくね。」

花ちゃん 「ところで、どうして、そんなにお茶^{ちや}を飲む^ののが好き^すなんですか。」

モンタ博士 「お茶^{ちや}にはね、気分^{きぶん}をよくしたり、頭^{あたま}の働き^{はたら}をよくする^{むかし}んだよ。昔^{むかし}、お茶^{ちや}は、
薬^{くすり}として飲む^のでいたんだよ。」

オー君 「お茶^{ちや}は頭^{あたま}がよくなる^きのか。そいつはいいことを聞いたぞ。」

花ちゃん 「モンタ博士。ふつうの野山^{のやま}にも、お茶^{ちや}の木^きはある^すんですか。」

モンタ博士 「もちろんあるよ。国立^{くにたち}の野山^{ほやま}のあちこちにあるよ。みんなでさがしてごらん。」

茶はみな同じチャの葉っぱから

東海道を旅すると、茶畑が広範囲に広がっており、特に静岡県では県花ともなっているそうだ。それらは、すべて緑茶であるが、製法の違いによってウーロン茶も紅茶も作れてしまうのである。すなわち、紅茶とは、茶の生葉をしおらせて、もみ、圧して発酵させてから、乾燥させたものであり、ウーロン茶とは、弱く発酵させたもので、緑茶と紅茶の中間的なものである。

なお、世界で最も飲まれているお茶といえば、それは紅茶であり、世界の75%にもものぼっている。なお、緑茶の高級品と言われる玉露（あまり縁がない）とは、芽の出る前に20日くらいすだれで覆うか、茶の木に直接わらを薄くかけて組織が固まらないようにしたものを摘み取り、もんで乾かしたものである。また、お抹茶というのは、玉露の葉の柄などの固い部分を取り除き粉末にしたものである。みんなでお茶を飲みましょう。



チャ（ツバキ科）